近代における「ガ行鼻音」の認識

内　田　智　子

1　はじめに

いわゆる標準語において語頭以外のガギグゲゴの音は鼻音化するとされており、一般にこの音は「ガ行鼻濁音」や「ガ行鼻音」（本稿では、以下「ガ行鼻音」とする）と呼ばれている。この音の存在に関しては、早いところでは『音曲玉淵集』（1727／享保12）に記載があり、近世においてもいくつか言及が見られるものの、本格的な言及が始まったのは近代になってからであると推測される。

本稿では、近代のガ行鼻音に関する記述を見ていくことで、ガ行鼻音に対する認識がどのように展開していったのかを明らかにしたい。

ガ行鼻音の考察を行うにあたり、まず、現代におけるガ行鼻音の記述を見ておきたい。

> 東京語その他で、文節の初め以外に現れる、鼻音のガ行子音［ŋ］のこと。ガ行子音には、破裂音［g］と、これに対応する鼻音［ŋ］とがある。東京語は文節の初めでは、［geta］［gakuʃa］のように［g］、それ以外においては、［meŋane］［kaŋo］のように［ŋ］と、発音し分ける。（以下略）
>
> （『国語学辞典』「ガ行鼻音」の項）

その他、「ガギグゲゴ」という表記の使用、兵庫・徳島以東の大部分に分布していること等の記述もある。

本稿では、近代に見られるガ行鼻音についての記述を、表記、地域差、IPAの導入、音声記述等の面から精査し、ガ行鼻音に対する認識の変遷を見ていきたい。

2　「半濁音」の項に見られる「カ行仮名」とその表記

明治初期の文典類には、最初に文字や音声に関する記述があり、五十音図とともに、「清音」、「濁音」、「半濁音」等の説明がなされていることが多い。当時の多くの文献で、「清音」の項目に「カキクケコ」、「濁音」の項目に「ガギグゲゴ」が見られる。また、「半濁音」には「パピプペポ」が掲載されているのが一般的である。

しかし、川本（1990）や岡島（2001）等でも指摘されているように、当時の文典類には、以下のように、「半濁音」の項目に、パピプペポ以外に「ガギグゲゴ」（カキクケコの右肩に「ゝ」）が掲載されているものが、少なからず存在する。

半濁音　　牙　カキグケゴ　　唇　パピプペポ
（文部省編（1873／明治6）『単語篇』2ウ）

半濁音　　ナカバニゴルコヱ　　牙　カキグケゴ　　唇　パピプペポ
（伴源平編（1874／明治7）『単語独稽古』2ウ）

同様の記述が、筆者が確認できたものだけでも、若林長栄（1874／明治7）『小学必携生徒学初』、中村最文（1874／明治7）『日本会話　巻一』、藤沢親之（1874／明治7）『日本消息文典　上』、吉川雅雄・大谷俊三（1876／明治9)『英和単語図解　前篇』、旗野十一郎（1877／明治10）『日本詞学入門　巻之上』、小野藤吉（1887／明治20）『単語五千便』等に見られる。すべて、「半濁音」の項目には「カキグケゴ」「パピプペポ」の10文字が掲載されている。一方で、「半濁音」の項目に「パピプペポ」のみが掲載されているものも多いため、当時において「半濁音」に「カキグケゴ」が入ることが一般化していたとは言いがたい。

明治時代において「半濁音」にカ行仮名が入ることがあるという事実は、従来より指摘されており、岡島（2001）は鳥海松亭『音韻啓蒙』を紹介し「江戸時代の韻学に遡る可能性」を述べている。また、「ガキグケゴ」のように「ゝ」を右肩に打つ表記については、沼本（1990）が半濁音符成立について述べる中で、ハ行仮名に「ゝ」を付した近世以前の資料を紹介している。「ガキグケ

ゴ」という表記については、佐藤信夫（1890／明治23）『助言例』にも見られる。ここでは、清音に「かきくけこ」、濁音に「がぎぐげご」が掲載されており、「次清」として「ぱぴぷぺぽ」、「次濁」として「がぎぐげご」が挙げられている。「次清」「次濁」もまた近代以前の中国音韻学を継承した用語である。岡島（2001）も、明治期の記述から、韻鏡との関連性を指摘している。

明治期において、「ガギグゲゴ」という表記以外に、「半濁音」として「ガギグゲゴ」（カキクケコの右肩に「○」）という表記も出現する。

問　半濁音は
答　十音ありて別に字を製らず　清音の字を用ゐ又（○）の符号を加へてこれを識別することあり　半濁音図をみよ
半濁音図

カ行	ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	上顎音
ハ行	パ	ピ	プ	ペ	ポ	唇音

（春山弟彦（1877／明治10）『小学科用日本文典』4オ）

落合直文・小中村義象（1890／明治23）『日本文典』や、大川真澄（1893／明治26）『普通教育日本文典』にも同様に、「半濁音」として「ガギグゲゴ」の文字が挙げられている。「已に一の半濁音なる以上は、波行とひとしく○点を施し、濁音と区別する方至当なるべし」（落合直文・小中村義象（1890／明治23）『日本文典』p.10）あることからも、これらは、パピプペポと同じ半濁音ということで表記を統一しようとしたものと推測される。明治期におけるガ行鼻音の表記については、川本（1990）に詳細な報告があるので参照されたい。

3　「半濁音」と「ガ行鼻音」

前節では「半濁音」に掲載されるカ行仮名について述べたが、これは従来、「ガ行鼻音」と認識されている。

明治前半までは、カ行仮名が「半濁音」に掲載されていても、具体的な音の説明はほとんど見られないのであるが、その中で、旗野十一郎（1877／明治10）『日本詞学入門　巻之上』に、「半濁　ガキグゲゴ」「カ経の濁音を鼻へ響かしンの字をかうむらせて呼ふときの音」（6ウ）という記述が見られる。また、

稲垣千頴（1881／明治14）『小学用語格』では「半濁音　カキクケコ」、横にルビの形で「ンガ　ンギ　ング　ンゲ　ンゴ」と書かれており、「此音入鼻声ナル故ニ、上ニ掣音ノンヲ冠ラスレバ呼ビ易シ」（16オ）という記述がある。これらから考えて、当時の「半濁音」に見られるカ行仮名は、ガ行鼻音を表わしたものであると見てよい。

明治30年頃になると、「カ行の半濁音」に対する音の説明が多く現れ始める。

> ガギグゲゴは、世人一般に、ガギグゲゴを以て、代用し居れども、（我）わが、（限）かぎりなどの如きは、が、ぎと、自ら異なるところあれば、区別する方が、至当であらう。
>
> （糸左近（1902／明治35）『雅俗対照 和漢の文典』p.9）

この記述の前には、「半濁音」として「がぎぐげご」が挙げられている（p.8）。語例が提示されて「わが」の「が」、「かぎり」の「ぎ」などが半濁音とされ、濁音とは区別すべきと述べている。また、大島正健（1898／明治31）『音韻漫録』では、カ行音に対し、「本濁音は、ガギグゲゴ、半濁音は、カキクケコなり。（中略）カキクケコは鼻音なり。」（pp.13-14）と書かれている。半濁音という分類ではあるが、同じく半濁音とされるパ行音とは異なる説明を試みていると言えよう。

明治前半は、ガ行鼻音を半濁音とする記述が多く存在しているが、明治30年頃になると、以下のような記述も現われる。

> 古来濁音の区別の如きは甚しく誤り来れり。パ行を次清音なりと云ひ、ナ行、マ行、ラ行を清音と云ひガ行（ンガ行）を半濁音といへるが如き、皆誤れる濁点「゛」になづめる辟説なり。
>
> （松下大三郎・宮本静（1898／明治31）『中等教程日本文典』p.247）

これは、従来、ガ行鼻音を半濁音としてきたことに異を唱える記述である。この頃から、西洋言語学の影響もあり、従来使用されてきた伝統的音韻学の術語と枠組み全体に対する見直しが行われ始める。

そして、この時代になると、このガ行鼻音の子音部分にアルファベット「ng」を使用するものが出てくる。大島正健（1898／明治31）『音韻漫録』には「加行濁父音（g）及び半濁父音（ng）」（p.12）という項がある。カ行の

「半濁父音」が「ng」で表示されていることに注目したい。大島の「父音」は現代の「子音」と同義であることから、カ行の半濁音の子音部を「ng」で表記していることが分かる。上田万年（1897／明治30）『国語のため』所収の「清濁音」にも、「この鼻にかかる濁音を示すに、かりにがぎぐげごの字を以てす、これをローマ字にて書けば、即ngなり」（p.187）という記述がある。上田には「半濁音」という記載はないが、「鼻にかかる濁音」「かきぐげご」に「ng」を当てていることから、ガ行鼻音の子音として「ng」を使用している。他にも、大槻文彦（1897／明治30）『広日本文典』に「加行ノ濁音ハ、他音ノ下ニ接スルトキハ、常ニ鼻ニ通ジテ発ス、其音、「んが、」（ng）んぎ、」んぐ、」ナド聞ユ」（pp.23-24）とあり、ガ行鼻音として「ng」が使用されている。さらに、亀田次郎（1909／明治42）『国語学概論』には「喉的鼻音ng」という項があり、以下の記述がある。

> 東京言につきていへば、「ナガイ」（長）の「ガ」、「ミギ」（右）の「ギ」、「ツグ」（継）の「グ」、「ヨゴス」（汚）の「ゴ」、の子音の如きは、何れもこの喉的鼻音ngに属するものにて、通常「ガギグゲゴ」の文字を借りて、この音を写せども、このngは、密閉的喉音の「カキクケコ」の濁音とは、全く異るものなり。ngは今日の東国方言には、殊に語の中下に於て、極めて多く存在するものにて、普通の「ガギグゲゴ」と異る事は、早く学者の認めたる所なり。近時このng音を写すに、ガキグゲゴと加行の文字の右肩に「ゝ」を附して用ふるなり。
>
> （亀田次郎（1909／明治42）『国語学概論』pp.143-144）

明治期を通して見ると、明治初期から見られる「ガギグゲゴ」「ガギグゲゴ」という表記は残るが、「半濁音」という分類は明治後期になると消えていっているようである。また、明治30年頃からガ行鼻音の子音部を「ng」で表わし、より精密な音声記述の試みがなされている。

4　ガ行鼻音の有無の地域差

明治期において、ガ行鼻音についての記述は、方言に関する記述とともに現れることが多い。

大槻文彦（1897／明治30）『広日本文典』には、以下の記述がある。（一重下

線は筆者による。以下同じ。）

> 加行ノ濁音ハ、他音ノ下ニ接スルトキハ、常ニ鼻ニ通ジテ発ス（中略）但シ、此ノ音、古クハ無カリシモノカ、今モ、九州人ノ口ニハ発セズ。
>
> （大槻文彦（1897／明治30）『広日本文典』pp.23-24）

ガ行鼻音は九州では使用されていないという記述である。同年出版の上田万年（1897／明治30）『国語のため』所収「清濁音」には、「カ行（清音）とガ行（濁音）と、K-G（ng）」として、以下の記述がある。

> 此濁音には、地方によりて鼻にかかるものあり。たとへば東京語のうぐひす、むごいなどに於けるぐごの如し。是等の語を九州人の発音する時は全く純粋の濁音なり。
>
> （上田万年（1897／明治30）『国語のため』p.187）

鼻音は、東京地方には存在するが、九州地方には存在しないという記述である。当時において、この音が九州で使用されないことは知られていたようである。

前掲の大島正健（1898／明治31）『音韻漫録』は、ガ行の本濁音（g）及びガ行鼻音に関して、さらに進んで以下の記述がある。

> 本濁音のみを用ゐる地方を原ぬるに、九州一円、四国の西部、山陰、山陽の西部及び中部、北陸の中部及び北部にして、就中越後に於いては、此音最も強くきこゆ。（中略）助辞又言の中或は下にガギグゲゴの用ゐ行はれて、其音の顕著にきこゆるは、東海、東山、両道の諸国なり。東京近傍の東訛に、此音の耳立つは、他方の人の常に注意する所なり。而して是より北に進み、鼻音次第に力を増し、此類の音のみならず、遂に彼の一般鼻にかかる、奥羽音とはなるなり。
>
> （大嶋正健（1898／明治31）『音韻漫録』pp.13-15）

ガ行鼻音の地域差についてかなり詳細な記述がなされている。特にガ行鼻音を「鼻音」という、より大きな枠組みで捉え、東北地方の音との関連性に言及した点は注目に値する。

ガ行鼻音に関しては、前掲の上田万年（1897／明治30）「清濁音」に、「言語学上より日本語に於ける此清濁音を観察せば、猶ほ他に論ずべき事、研究すべき事多かるべし」（p.193）とあり、「例令ば」として「G或はNGが、現今の日本語にては如何なる地方にて区別して発音せられ居るかの事。」（p.193）とある。

このガ行鼻音の有無の地域差は、おそらく上述のような議論を経て、明治38（1905）年、『音韻調査報告書』の以下の記述となって現れる。

> 「ガ」行鼻音ハ兵庫県及ビ徳島県ヲ界トシ其以東ニ広ク行ハル。只新潟県ヨリ東南一帯、群馬、栃木、埼玉、千葉ノ数県ニ亘ル地方ニ於テ、地続キニ此音ノ欠ケタルヲ見ル。
>
> （国語調査委員会編（1905／明治38）『音韻調査報告書』「音韻分布図ニ関スル注意」p.3）

『音韻調査報告書』は、その序言にあるように、国語調査委員会が「主トシテ普通教育ニ於ケル仮名遣ノ改正及ビ標準的発音ノ制定ノ参考ニ供センガ為メ」に実施した調査の報告書である。日本語の標準的な発音の制定において、ガ行鼻音が重要な関心事であったことが推測される。

大正時代になると、音声学協会が成立し、『音声学協会会報』（以下『会報』）でもガ行鼻音の地域差は重要課題となる。『会報』第1号（1926／大正15）に挙げられた「第二回研究問題」の「第三問題」として、ガ行鼻音が取り上げられている。

> 鼻にかかるガギグゲゴ［ŋ］に関する学術的或は常識的の意見又は感想を持寄りたい。尚此の音の地方的並に階級的分布を精確に知りたいから広く諸地方の同志から報告を仰ぎたい。
>
> ―石黒魯平氏提出（『会報』第1号）

これを受けて、まず発案者である石黒魯平が『会報』第2号（1927／昭和2）で「愛知県のガ行発音」を紹介、続いて平田鬼丸（1927／昭和2）「福岡県朝倉地方のガ行音」（『会報』第3号）、第一回大阪例会報告として「medialの「ガ」の地方的差」（『会報』第5号（1927／昭和2））、徳王観吉（1927／昭和2）「徳島県（阿波国）のガ行発音」（『会報』第5号）等、様々な地域の報告が寄せられるようになっていく。

以上のように、ガ行鼻音は方言との関連性でも言及されるようになり、国語調査委員会による『音韻調査報告書』を経て、大正、昭和時代の方言研究へと繋がっていく。さらにこの成果を以て、学界はガ行鼻音の歴史的研究へと進展したようであるが、この過程については今後改めて整理し直したい。

5　ガ行鼻音の現れ方

冒頭で見た『国語学辞典』の「ガ行鼻音」の項目において、ガ行鼻音は「文節の最初以外に現れる」とされているが、このような認識は明治前期に既に認められる。早いところでは、稲垣千頴（1881／明治14）『小学用語格』に以下の記述がある。

> 此音入鼻声ナル故ニ、上ニ掣音ノンヲ冠ラスレバ呼ビ易シ、是レ亦語首ニ置カズ　彼我（ヒガ）、仁義（ジンギ）、道具（ダウグ）、人間（ニンゲン）、保護（ハウゴ）等ノ字音、或ハ上（アガル）、限（カギル）、投（ナゲル）、又鬚（ヒゲ）、籃（カゴ）等ノ語ヲ呼ブ時、連声ノ便ニ生ズルノミナリ
>
> （稲垣千頴（1881／明治14）『小学用語格』16オ）

ガ行鼻音は「語首ニ置カズ」とあり、語例が列挙されている。明治30年代には、以下の記述が見られる。

> 加行ノ濁音ハ、他音ノ下ニ接スルトキハ、常ニ鼻ニ通ジテ発ス、其音、「んが、」（ng）んぎ、」んぐ、」ナド聞ユ、「くが、」（陸）はぎ、」（脛）あぐ、」（挙）すげ、」（菅）かご、」（籠）ナド、常ニ鼻ニ通ズ、「かんがへ、」（考）いんぎん、」（慇懃）ナド、「ん」ノ下ナルハ殊ニ然リ、但シ、一語ノ首ニ発セス。
>
> （大槻文彦（1897／明治30）『広日本文典』pp.23-24）

> 言の上にあるときは、諸国大方は本濁音を用ゐる。（中略）言の中又は下又は助辞には、半濁音を用ゐる所多し。萩をハキ、下髪をサゲガミ、反故籠をホグカゴ、我国をワガクニといふが如し。
>
> （大島正健（1898／明治31）『音韻漫録』p.13）

ガ行鼻音が「語頭に現れない」ことは明治前期から指摘されており、大槻や

大島の記述では、語頭に現れないことに加え、「語頭以外では多くの場合鼻音となる」ことが述べられている。さらに大槻の場合は「ンに後接するガ行音は特に鼻音化しやすい」としていることにも注目したい。

ガ行鼻音が語頭に現れないという認識は、大槻、大島のみならず、当時の一般的な理解であったようである。

> ここに、ガギグゲゴとしたのは、東京語などでは、一語の初発の音としては、殆どつかはぬが、其他の場合に於ては、ガギグゲゴに換へて、盛んに用ゐるものだ。たとへば、ゴゴ（午後）カガミ（鏡）カゲ（影）などのゴ、ガ、グの東京人の発音である。
>
> （岡倉由三郎（1901／明治34）『発音学講話』p.75）

> 詞の中、及び、下にありては、タマゴ（卵）、ウナギ（鰻）、サガミ（相模）、サンガイ（三階）等の如く、鼻腔より気息を漏らして発音することあり。
>
> （小泉秀之助（1902／明治35）『国語教育発音言語及仮名遣』p.53）

このように、明治35年頃においては、「ガ行鼻音＝語頭には現れない」という認識が共有されていたようである。

ここで、この「語頭には現れない」ということをさらに掘り下げてみたい。注目すべきは、前掲の稲垣千頴（1881／明治14）『小学用語格』の「連声ノ便ニ生ズルノミナリ」という表現である。つまり、稲垣はガ行鼻音を「連声」の一種、「音の変化」と捉えているということである。

この観点で明治期のガ行鼻音についての記述を調査したところ、関治彦編（1879／明治12）『語格階梯日本文法』巻二には「音便」として「次清音の如く呼ぶを常とす」とあり「天下　テンガ」「本国　ホンゴク」などの語例が見られた（pp.48-49）。また、大槻文彦（1897／明治30）『広日本文典』では、前掲の引用箇所の後に「連声ノ転ナリ」（p.24）という記述が見られる。

ガ行鼻音が「語頭に現れず、語頭以外では多く鼻音化する」という現象を、当時において「音の変化」と捉える立場もあったということである。これは、明治期においてガ行鼻音と同様に半濁音に分類されたパ行音が、「語頭に現れない」「音便として現れる」とされたことと無関係ではないと思われる。

しかし、「音便」「連声」などの項目にガ行鼻音が現われる文典は多くはない。当時の文典類における「音便」「連声」は、仮名遣いの問題と密接に関連して

いる。仮名遣い問題が重要な関心事であった当時において、文字として書き分ける必要がなかったガ行鼻音は、「音便」「連声」としてあえて記述するほどのテーマではなかったようである。

6　IPAの導入

6.1　「ŋ」の表記の導入

日本にIPAが導入されると、それまで「カ行の半濁音」「ガギグゲゴ」「ガギグゲゴ」「ng」等で表記されてきたガ行鼻音が「ŋ」の文字で表記されるようになる。

大西雅雄（1934／昭和9）『音声学史』で「万国音声学協会の発音記号を用ひた最初の書物」と評される片山寛、アール・ビー・マッケロー（1902／明治35）『英語発音学』には、以下の記述がある。

> ŋ 此音は日本の「建議」（ケンギ）、「我国」（ワガクニ）、「孫」（マゴ）等のガ、ギ、グ、ゲ、ゴの父音と同一にして、九州其他一二地方の人を除くの外本邦人に困難なる音に非ず
>
> （片山寛、アール・ビー・マッケロー（1902／明治35）『英語発音学』p.84）

IPAの音価、語例、及び九州地方では使用しないとの記述から判断し、ガ行鼻音の子音部を「ŋ」で表記したと見てよいだろう。

「万国発音記号」の解説書である加茂正一（1924／大正13）『万国発音記号手ほどき』には、以下の記述がある。

> ガギグゲゴは［ga, gi, gɯ, ge, go］と発音されるのが常である。語の半ばでは、［ŋa, ŋi, ŋɯ, ŋe, ŋo］の音を出す事がある。
>
> （加茂正一（1924／大正13）『万国発音記号手ほどき』p.74）

加茂は「ŋ」の文字自体に対しては、「後舌面を上あごに近づけ、‘のどびこ’を前に垂れて息を鼻に抜くと［ŋ］が出る。」（p.41）としており、また上記引用部からガ行鼻音の子音として「ŋ」の文字を使用していることが分かる。

IPAの導入によって、「ŋ」の文字がガ行鼻音の子音として使用されるように

なり、それ以降、日本語音の研究において、従来の「ガキグゲゴ」「ガギグゲゴ」「ng」等の表記に替わって「ŋ」の文字が使用されるようになっていく。

6.2　「ガ行鼻音」と「ン」

大正期になり、IPAの「ŋ」の表記が普及すると、この「ŋ」の文字は、日本語の「ン」の発音を表わすのにも使用されることとなった。

前掲の加茂正一（1924／大正13）『万国発音記号手ほどき』では、「ŋ」の文字に関して、以下の記述がある。

> 日本語にも屡々表はれる。[k]、[g]の前の‘ン’の音は皆[ŋ]である。
> （例）ゲンキ［geŋki］　カンゴ［kaŋgo］
> 語尾の‘ン’も[ŋ]である。
> （例）モン［moŋ］　ミカン［mikaŋ］
> （中略）
> [ga, gi, gɯ, ge, go]と[ŋa, ŋi, ŋɯ, ŋe, ŋo]とを区別せよ。後者をガギグゲゴで表はす。
> （例）ウサギ［ɯsaŋi］
> タマゴ［tamaŋo］
> （加茂正一（1924／大正13）『万国発音記号手ほどき』p.41）

「ガ行鼻音」の子音に「ŋ」の文字が使用されるようになったことは6.1で述べたが、これ以外に、一部の「ン」の音に対しても、「ŋ」の文字を当てていることが分かる。また、同じページの中で「ŋ」をガ行鼻音にも使用している。これは、ガ行鼻音の子音と一部の「ン」の音が同一であるということを直接的に示した記述であり、注目すべき記述である。

加茂正一は、「ン」の音に関しては、以下のようにまとめている。

> 日本語の‘ン’は発音学上四種類になる。
> （一）[n][t][d][ts][tʃ][dʒ][ɾ]の前の‘ン’は[n]である。（即ち、舌尖が上あごに着く）
> （二）[m][p][b]の前の‘ン’は[m]である。（即ち、両唇が接着する）
> （三）語尾の‘ン’及び[k][g][s][z][ʃ][ʒ]などの前の‘ン’は、

すべて［ŋ］である。（即ち、後舌面が上あごに接近する）
（四）母音の前の‘ン’及び［j］［w］の前の‘ン’は何れも［ŋ’］である。‘ン’を少し押へ気味で発音するのは、少し長いからである。
（加茂正一（1924／大正13）『万国発音記号手ほどき』pp.73-74）

IPA導入以前の大槻文彦（1897／明治30）『広日本文典』や、大島正健（1898／明治31）『音韻漫録』等には、このような記述は見られない。彼らは、ガ行鼻音の子音部を「ng」で表すが、それを「ン」の音に対しては適用していない。大槻の『広日本文典』では「ン」の音に関して「鼻声」とのみ記され、「ン」の音のローマ字での表記や分類は行っていない。大島の『音韻漫録』では、「ン」には「n」「m」の2種の音を認めるのみである。手島春治（1891／明治24）『日本文法教科書』では「ン」に対して「ン」「ム」「ng」の3種の音があることが述べられているが、ガ行鼻音に関する記述はない。

亀田次郎（1909／明治42）『国語学概論』には、「鼻音とは何ぞ及び其種類」（pp.141-145）という項があり、「鼻音」として「m」「n」「ng」が挙げられている。このうち「ng」に関しては約1ページにわたる記述があるが、ガ行鼻音に対する言及のみで、「ン」に関しては触れられていない。岡倉由三郎（1897／明治30）『日本文典大綱』は、「ン」に3種の音を認め、ガ行鼻音と「ン」にともに「ng」を使用しているが、両者を関連付けるような記述はない。

以上のことから考えると、ガ行鼻音の子音と一部の「ン」の音との同一性を直接的に示した加茂の記述は画期的なものであったと言えよう。

ガ行鼻音の子音と、一部の「ン」をともに「ŋ」で表記するのは、加茂正一に限ったものではない。同時代の神保格（1925／大正14）『国語音声学』でも「ŋ」の文字を、ガ行鼻音と「ン」の両者に使用している。

がぎぐげご。それぞれga gi gu ge goといふ音声連結を表す。文法にいふ単語の始めにある時この文字はgを表し、語の半又は後に来る時この文字はそれぞれŋa ŋi ŋu ŋe ŋoといふ音声連結を表す。例がんが［雁が］（gaŋŋa）、ぎんかう［銀行］（giŋkoo）、がくかう［学校］（gakkoo）、せうがくかう［小学校］（ʃooŋakkoo）など。（以下略）
（神保格（1925／大正14）『国語音声学』p.117）

ガ行鼻音の説明をしている箇所だが、「雁（ガン）」、「銀行（ギンコウ）」の

「ン」には「ŋ」の文字を使用している。「ン」については、以下の記述がある。

> 「ん」通例撥音文字など称せられる。この文字は一個の単音を表さず。数種の単音を表す。例へば「さんぼん」［三本］でmを表し、「さんど」［三度］でnを表し、「さんげん」［三間］でŋを表し、（以下略）
>
> （神保格（1925／大正14）『国語音声学』p.115）

ここではガ行鼻音と「ン」の音を直接的に関連付けた記述はないが、神保には「この鼻へ抜けるガ行子音は、例へばオンガク（音楽）、ナンギ（難儀）、テング（天狗）、レンゲ（蓮華）、ロンゴ（論語）などのンで書く部分にも使はれる」「このオンガク、ナンギなどのンを単独に発した音を表はすに、―ŋ―此の発音符号を使ふ。前にあげたカガミ、ミギ、コグ、ヒゲ、マゴのガギグゲゴを鼻にかけて発音するのは、このŋの音とアイウエオの母音とを連結するのである。」（「ガ行音に就て」『会報』第1号（1926／大正15）p.9）という記述がある。『会報』においても、似たような記述は多々あり、大正末期～昭和初期には、ガ行鼻音の子音と一部の「ン」の音の同一性が認められていたようである。

以上より言えることは、IPAの「ŋ」の文字が導入された後で、ガ行鼻音と「ン」との同一性に対する言及が出現したようであるということである。しかし、IPAの導入が契機となってこの事実に気づかれたのかどうかは不明である。表面的に見れば、従来の「ng」の表記が「ŋ」の表記に変わっただけであり、明治期に同様の言及があっても不思議ではない。この問題は、「ン」を巡る問題とも密接に結びついているように思われる。明治期の文典において「ン」は五十音図に入らないことが多く、文字としても音図上の他の文字とは同列に扱われない。「ン」に対する分類と説明法、「鼻音」の概念、「撥音」という用語、そしてさらに伝統的音韻学における三内韻尾から連なる問題等、「ン」をめぐる問題は数多く存在する。本稿では、ガ行鼻音の子音と「ン」の同一性に関する言及にとどめ、「ン」に関する諸問題については、また別の機会に論じたい。

6.3　音声分析と体系への組み込み

前節までで、ガ行鼻音の表記、地域差、IPAの導入による認識の変化等について見てきた。以下では、ガ行鼻音の子音に関し、当時の研究者たちが行った音声分析を「体系への組み込み」という視点から見ていきたい。

明治期から、ガ行鼻音に関し、「ガキグゲコ」「ガギグゲゴ」という表記、子

音は「ng」の表記が使用されていたこと、IPAの導入によって「ŋ」という表記が現れたことは前述のとおりである。明治期において、ガ行鼻音に関しては、「鼻ニ通ジテ発ス」（前掲『広日本文典』）、「鼻にかかる」（前掲「清濁音」）の記述が一般化していた。しかし、当時、ガ行鼻音の子音部を表わすのに使用された「ng」という表記の解説を見ると、より詳細な音声分析が確認できる。

まず、岡倉由三郎（1891／明治24）『日本新文典』には、「父音分類表」というものが掲載されている。以下がその表である。（縦型の表を横型の表に組みなおした）。

【父音分類表】

	断音	続音	
		鼻音	非鼻音
軟齶音	k　g	ng	h　y
硬齶音			s　z　sh　j　r
齦音		n	t　d
唇音	p　b	m	w　f

（岡倉由三郎（1891／明治24）『日本新文典』p.11）

これを見ると、当時、大槻、大島らがガ行鼻音の子音として使用した「ng」は「軟齶音・続音・鼻音」に分類されている。そして、同じ「軟齶音」としてカ行音の子音「k」、ガ行音の子音「g」が挙げられており、これらを同じ調音部位の音として捉えていることが分かる。一方で、「ng」「n」「m」は同じ「鼻音」の列に並んでいる。（なお、この『日本新文典』の中で岡倉は「ng」をガ行鼻音の子音には当てていないが、岡倉由三郎（1897／明治30）『日本文典大綱』では「ng」に「ガギグゲゴ」の文字を当てている。）

同時代の上田万年も、ガ行鼻音の子音に「ng」の文字を使用している。新村出筆録の上田の講義ノート（『上田万年　言語学』）によれば、まず「音の分類」のうちの「Nasale」として、「m」「n」「ng」の3種が挙げられ（p.91）、「Nasale」の中の「Guttural」として「ng」が挙げられている（p.101）。また、「p-b-m　t-d-n　k-g-ng」という対応関係、「無声閉鎖音―有声閉鎖音―鼻音」という対応関係が示され、従来対応する仮名がないngに関し、「日本語ニテモ、

gとngトノ区別ハタシカニ存セリ。（東京語）」（pp.301-303）という記述がある。ガ行鼻音の子音に関し、調音部位と調音法の関係性を体系的に捉えていることに注目しておきたい。

そして、「ng」の表記において言えば、岡倉の表にも見られるように、調音部位においては「g（ガ行子音）」と「ng（ガ行鼻音子音）」とが同列に並び、「鼻音」という分類においては「ng／n／m」（ンの音）が同じ列に並んでいる。この体系的な捉え方から判断すれば、［ŋ］と「ン」と「ガ行鼻音の子音」との関連性の言及につながる下地は、この段階で完成していたと考えられる。

さらに、昭和期にはいると、「鼻音」と「濁音」の関係性に関し、より大きな視点で捉える論が現れる。松本之盛は、『会報』第10号（1928／昭和3）で「鼻音化と鼻濁音化」と題し、以下のように述べる。

> 当地方（筆者注：岩手県紫波郡）に於いて、
> 1）所謂濁音「ざ行」「だ行」「ば行」の音が語の中間又は下にあるときは常に鼻音化するやうです。丁度g行音で語の中間又は下にあるときŋ行音になるやうに。
> 2）所謂清音「か行」「た行」が語の中間又は下にあるときは濁音「が行」「だ行」に発音する。（あらたまつた云ひ方にはかうならない）
> 例　イト（糸）がイド　ナタ（鉈）がナダ　この場合には鼻音化しない。
> 3）（1）の場合のやうに鼻音化するのは（2）の場合と区別するために自然に生じたやうに思はれる。
> （松本之盛「鼻音化と鼻濁音化」『会報』第10号（1928／昭和3）pp.7-8）

岩手県における濁音の鼻音化を、ガ行鼻音の現象と絡めて論じたものである。神保格がこの論に賛同しており、特殊なものとして捉えられてきたガ行鼻音の現象を一般化したという点で評価できる論である。

この発想は、金田一京助（1932／昭和7）『国語音韻論』「子音の同化」の項に「鼻音化（Nasalization）」として現れる。

> 現代発音に於ては、中央の標準的発音では語中の［g］は皆［ŋ］に発音されるけれど、［g］に発音する人があつても、理解には差支へなきのみならず、写すにも同一字で写して、別な音と思はない。小学校・女学校を［ʃo:ŋakko:］［dʒoŋakko:］或は［ʃo:gakko:］［dʒogakko:］、どちらに云つ

ても少しも差支へない。若しバ行・ダ行を［n］［m］に発音したら、すぐ支障を来すのに。

（金田一京助（1932／昭和7）『国語音韻論』p.165）

まずこのようにガ行鼻音を取り上げたあとで、東北地方の状況を述べている。

現代発音で、東北は語中の［b］の前にン（m）が一寸入り、語中の［d］の前にン（n）が一寸入り、語中の［g］は全く［ŋ］にしてしまつてゐる。

（金田一京助（1932／昭和7）『国語音韻論』p.165）

「鼻音化」という枠組みでガ行鼻音を説明し、さらにそれを「子音の同化」現象の一つとして扱うことで、ガ行鼻音は特殊な現象から音韻変化の一つの現象として一般化されたと言えるだろう。このことは、5節で指摘した「音便」「連声」を想起させる興味深い問題である。

7　おわりに

本稿では、近代におけるガ行鼻音に関する認識の変遷を見てきた。ガ行鼻音の存在は、明治期の初めには既に認められており、当初その音は「パピプペポ」とともに「半濁音」に分類され、カ行に「清音」「濁音」「半濁音」の3種類があるとした文献も少なくない。この段階では「清音」に「カキクケコ」、「濁音」に「ガギグゲゴ」、半濁音に「ガ゚キ゚グ゚ケ゚コ゚」「ガ゚ギ゚グ゚ゲ゚ゴ゚」という表記が使用されている。明治30年ごろになると、この音に対する具体的な言及が多く現れ始め、「鼻にかかる音」というような説明が散見されるようになる。また、この音の子音部を「ng」で表記するものも現れ始める。

一方で、ガ行鼻音の地域差にも目が向けられ、「東京で使用される」「九州では使用されない」といった記述が現れ、明治38年の『音韻調査報告書』、大正～昭和にかけての『音声学協会会報』等を通して議論が進展していく。昭和期に入ると、ガ行鼻音の地域差は、歴史的音声研究へと展開していくようであるが、この経緯に関しては今後の課題としたい。

ガ行鼻音が語頭以外に現れるという記述も明治期から見られる。大正期に入りIPAが普及すると、ガ行鼻音の子音は「ŋ」の文字で表記されることとなり、それと時を同じくして一部の「ン」の音にも「ŋ」の表記が使われるようにな

る。ガ行鼻音の子音と一部の「ン」の音との同一性が注目されるようになり、このあたりから「ン」の音に関する本格的な研究が行われるようになったと推測される。本稿では触れられなかったが、「相模（サガミ）」という言葉に対し、漢字音の面から「相」の中国原音が［sang］と韻尾が［ŋ］であることと、「相模」が［saŋami］とガ行鼻音になることとの関係性に言及するものが明治後期から見られる。この視点は伝統的音韻学から連なるものであり、近世期の研究を踏まえることで、また別の視点から研究史を再構築できる可能性がある。

最後に、ガ行鼻音の音声分析を「体系」として捉えていく過程を紹介した。「調音部位」と「調音法」による子音の分析は、ガ行鼻音をより大きな枠組みで捉えることに成功し、さらに「子音の同化」や「鼻音化」という概念を導入することで、明治前期に「半濁音」という特殊なものであったガ行鼻音の現象は、体系に組み込まれることで一般化されることとなった。

今回は一部の視点からしか記述できなかったが、ガ行鼻音をめぐる問題はまだ数多く残されている。その後の音韻論の導入によって、ガ行鼻音を別の文字で書き分ける必要性の有無が問題となり、一部の「ン」の音とガ行鼻音の子音との同一性は、「ン」の音声研究の進展にともなって再び問題化されることとなる。さらに、「ン」との関連性については、「音楽」の発音が［oŋŋaku］なのか［oŋgaku］なのかという点も問題となってくる。これらの問題についても今後考えていきたい。

【使用テキスト・参考文献】

糸左近（1902／明治35）『雅俗対照和漢の文典』（国立国会図書館デジタルコレクション）
稲垣千頴（1881／明治14）『小学用語格』（国立国会図書館デジタルコレクション）
上田万年（1897／明治30）『国語のため』（国立国会図書館デジタルコレクション）
大川真澄（1893／明治26）『普通教育日本文典』（国立国会図書館デジタルコレクション）
大島正健（1898／明治31）『音韻漫録』（国立国会図書館デジタルコレクション）
大槻文彦（1889／明治22）『語法指南』（日本語文法研究書大成・1996・勉誠社）
大槻文彦（1897／明治30）『広日本文典』（国立国会図書館デジタルコレクション）
大西雅雄（1934／昭和9）『音声学史』明治書院
岡倉由三郎（1891／明治24）『日本新文典』（国立国会図書館デジタルコレクション）
岡倉由三郎（1897／明治30）『日本文典大綱』（国立国会図書館デジタルコレクション）

岡倉由三郎（1901／明治34）『発音学講話』（国立国会図書館デジタルコレクション）
岡島昭浩（2001）「半濁音名義考」（『筑紫語学論叢　奥村三雄博士追悼記念論文集』風間書房）
落合直文・小中村義象（1890／明治23）『日本文典』（国立国会図書館デジタルコレクション）
落合直文（1893／明治26）『普通日本文典』（国立国会図書館デジタルコレクション）
小野藤吉（1887／明治20）『早引単語五千便』（国立国会図書館デジタルコレクション）
音声学協会編（1926／大正15 – 1929／昭和4）『音声学協会会報』
亀田次郎（1909／明治42）『国語学概論』博文館
片山寛、アール・ビー・マッケロー（1902／明治35）『英語発音学』（国立国会図書館デジタルコレクション）
加茂正一（1924／大正13）『万国発音記号手ほどき』（国立国会図書館デジタルコレクション）
川本栄一郎（1990）「幕末の『獄中記』に見られるガ行鼻濁音表記とその系譜」（『国語論究2』明治書院）
金田一京助（1932／昭和7）『国語音韻論』刀江書院
小泉秀之助（1902／明治35）『国語教育発音言語及仮名遣』（国立国会図書館デジタルコレクション）
国語調査委員会編（1905／明治38）『音韻調査報告書』（国立国会図書館デジタルコレクション）
佐久間鼎（1929／昭和4）『日本音声学』（1963年復刻版　風間書房）
佐藤信夫（1890／明治23）『助言例』（国立国会図書館デジタルコレクション）
神保格（1925／大正14）『国語音声学』明治図書
新村出筆録（1975）『上田万年　言語学』教育出版
関治彦編（1879／明治12）『語格階梯日本文法　巻二』（国立国会図書館デジタルコレクション）
手島春治（1891／明治24）『日本文法教科書』（国立国会図書館デジタルコレクション）
中村最文（1874／明治7）『日本会話　巻一』（国立国会図書館デジタルコレクション）
沼本克明（1990）「半濁音符史上に於ける唐音資料の位置」（『国語学』162集）
旗野十一郎（1877／明治10）『日本詞学入門　巻之上』（国立国会図書館デジタルコレクション）
春山弟彦（1877／明治10）『小学科用日本文典』（国立国会図書館デジタルコレクション）
伴源平編（1874／明治7）『単語独稽古』（国立国会図書館デジタルコレクション）
平野秀吉（1902／明治35）『国語声音学』（国立国会図書館デジタルコレクション）

藤沢親之（1874／明治7）『日本消息文典　上』（国立国会図書館デジタルコレクション）
松下大三郎・宮本静（1898／明治31）『中等教程日本文典』（国立国会図書館デジタルコレクション）
村田鈔三郎（1893／明治26）『国語文典』（国立国会図書館デジタルコレクション）
物集高見（1878／明治11）『初学日本文典』（国立国会図書館デジタルコレクション）
文部省編（1873／明治6）『単語篇』（国立国会図書館デジタルコレクション）
吉川雅雄・大谷俊三（1876／明治9）『英和単語図解　前篇』（国立国会図書館デジタルコレクション）
若林長栄（1874／明治7）『小学必携生徒学初』（国立国会図書館デジタルコレクション）
国語学会編（1955）『国語学辞典』東京堂出版
佐藤喜代治編（1977）『国語学研究事典』明治書院

キーワード：近代　ガ行鼻音　IPA